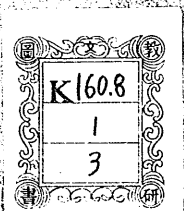
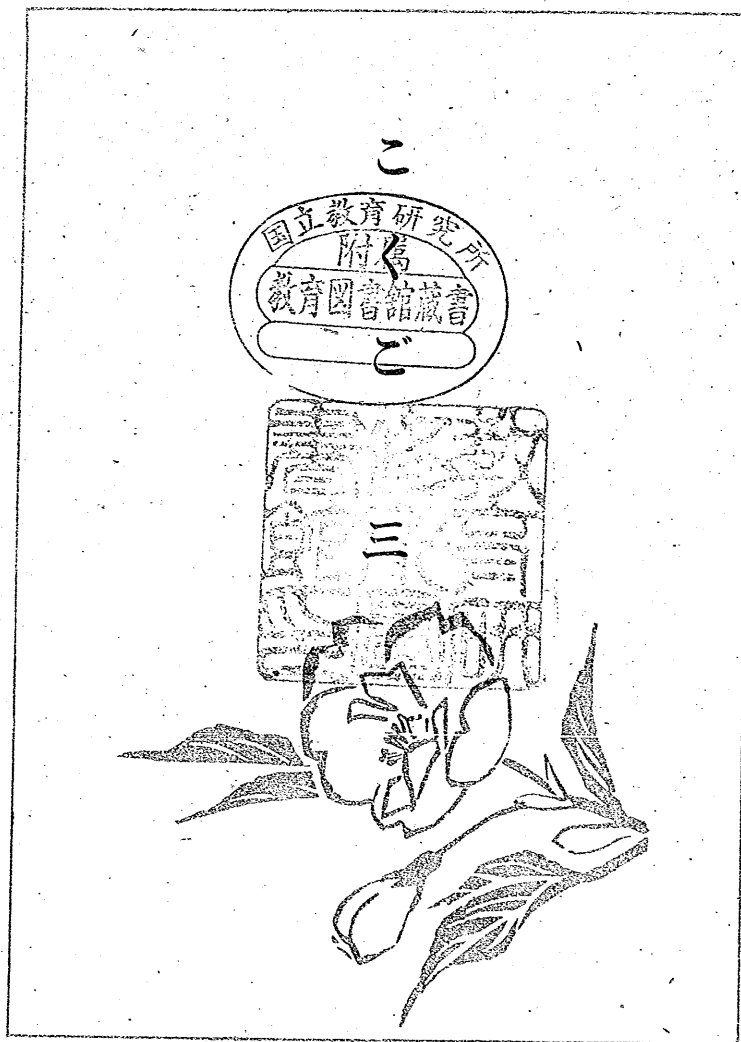
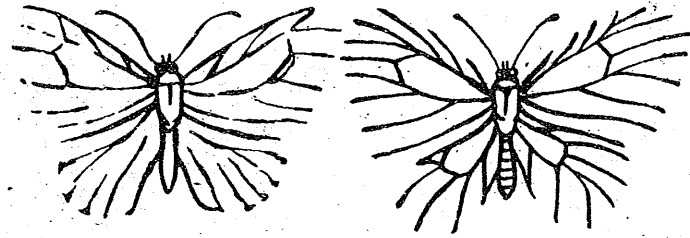




こ
く
こ







もくろく

一 春の声 四

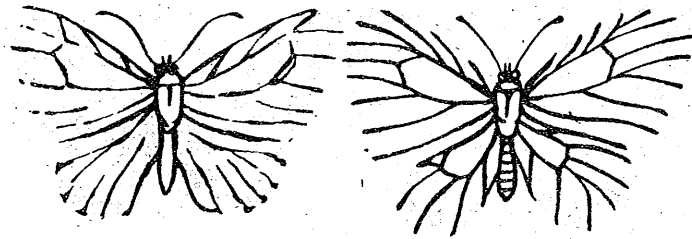
二 花まつり 九

三 ことばあつめ 十八

四 はやとり 二十二

五 学校 三十

六 かえり道 三十九



七 白うさぎ 四十三

八 高い 高い 四十九

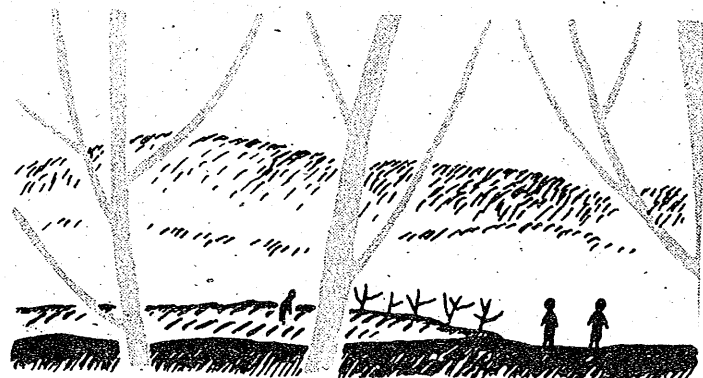
九 五人の子ども 五十八

十 ひびき 八十五

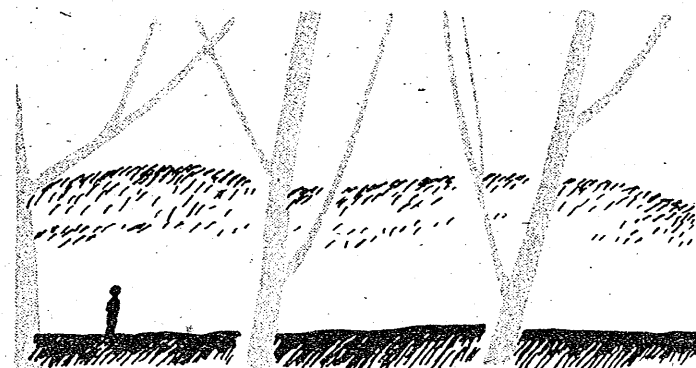
十一 みんなのもの 九十

十二 一まいの紙 九十四

十三 かぐやひめ 百



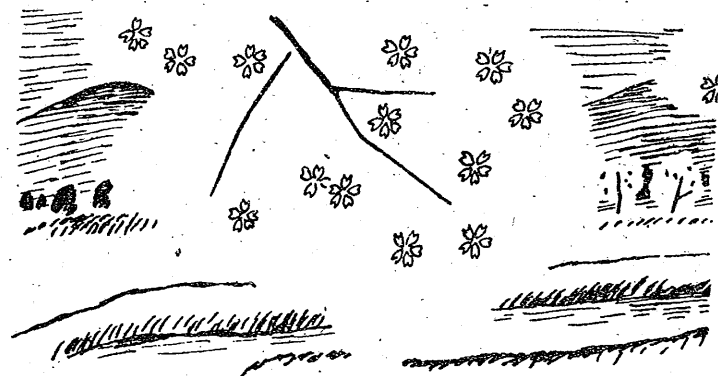
みんな　「山びこ。おうい、おうい。」
 さぶろう　「あかるい　山。」
 みんな　「山の　あの　色。」
 さぶろう　「あたたかな　かぜ。」
 みんな　「かぜの　手ざわり。」
 ともお　「ひろい　はたけの　中で。」
 さぶろう　「たねまき、たねまき。」
 みんな　「たのしい　たねまき。」
 ともお　「ああ、お日さま。」
 みんな　「お日さまの　光、光。」



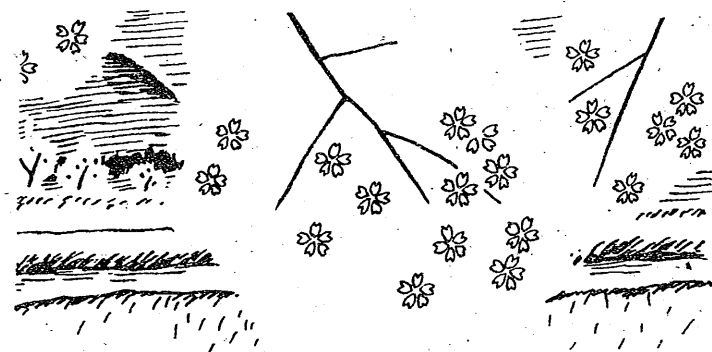
一 春の 声

(一)

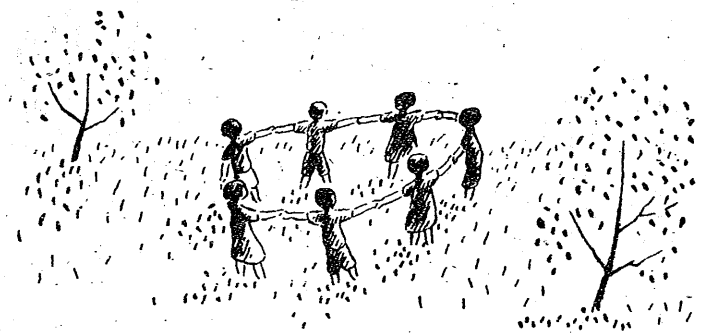
まさお　「やあ。」
 みんな　「やあ。」
 ただし　「山。」
 みんな　「山、山。」
 まさお　「ばねかえる。」
 みんな　「ばねかえる。」
 ただし　「山の　山びこ。」



みんな かすみになく ひばり。
 すみこ 「さらさら、さらさらさら。」
 みんな 「さらさら、さらさらさら。」
 のぶこ 小川のながれ。
 すみこ 白いくものながれ。
 みんな 「さらさら、さらさらさら。」
 (三)
 たつお 「おうい。」
 みんな 「おうい、おうい。」
 たつお みんな あつまれ。



(三)
 さちこ 「ぼあ。」
 みんな 「ぼあ。」
 ゆりこ 「春。」
 みんな 「春、春。」
 さちこ 「おきあがる。」
 みんな 「おきあがる。」
 ゆりこ どこも さくら。
 みんな 「さくら、さくら。」
 すみこ 「たなびく かすみ。」



みんな「あつまれ。」

いさむ「さあ、手を つなごう。」

みんな「手を つなごう。」

たつお「わに なるう。」

みんな「わに なるう。大きな 大」

きな わに なれ。」

さきこ「東の 友だち。」

みんな「西の 友だち。」

たけひこ「南の 友だち。」

みんな「北の 友だち。」

二 花まつり

花まつり

すみれ、たんぽぽ、れんげそう、

花の おやねが うつくしい。

あまちゃんの中から ひょっこりと、

おでになったか、おしゃかさま。

上と 下とを ゆびさして、
お立ちに なって いらっしゃる。

小さな ひしゃくで おちや

んで、

かけて あげましょ、 おしゃかさま。
ま。

ちょうも 小鳥も たのじそう、

きょうは あなたの 花まつり。



はんたか

おしゃかさまに はんたかと いう でしが いました。
はんたかは ものおぼえが わるく、そのうえ、ものが
よく いえませんでした。

おしゃかさまは、どうかして はんたかを りっぱな
人に して やりたいと、おおもいに なりました。

そこで、まいにち かしこい でしを、ひとりずつ は
んたかの ところへ やって、いろいろと ものを おし
える ことに しました。

一年 たちました。けれども、なにも おぼえません。
二年 すぎました。まだ なにも おぼえません。
三年 になりました。やはり かしこく なりません。
おしゃかさまは、

では、わたしが はなしを して みよう。

と おっしゃって、はんたかをおよびに しました。

「はんたか、おまえは たくさんの ことを おぼえなく
ても よろしい。ただ ひとことを しっかりと おぼ
えなさい。」

はんたかは 目を ががやかせて、おしゃかさまの お

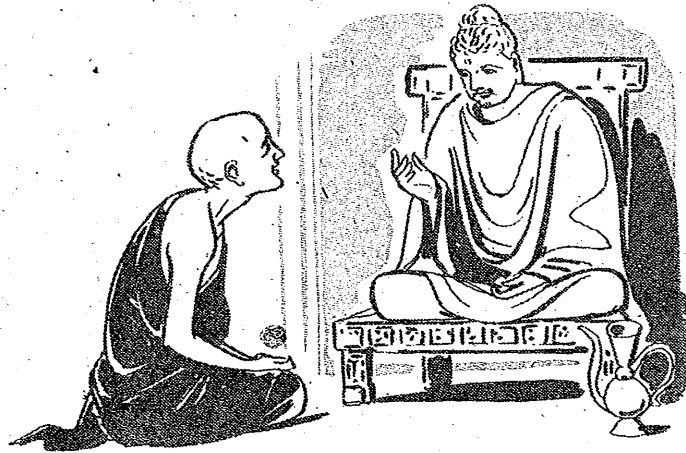
かおを みつめました。

「その ひとことと、いうの
は、きたない ことばを

つかわないと、いう こと
だよ。わかったかい。」

はんたかは、この ひとこ
とを、心の中に しまいま
した。

そのうちに、きたない こ
とばは、きたない 心から



うまれて くる ものだと いう ことが わかりました。
きれいな ことばは、きれいな 心から うまれて くる
ことも わかりました。

「おしゃかさまの おしえて くださった ことは、きれ
いな 心になれど いう ことに ちがいない。」
と さとりました。

ある 日、おしゃかさまは、王さまの おまねきに あ
ずかりました。

おしゃかさまは たくさんの でしを つれて、王さま
の、ごてんに まいりました。

はんたかも おしゃかさまの はちを もって、でしの
中に まじって いました。ごてんの いり口まで きま
すと、門ばんが、はんたかを みて、

「おまえさんのような おろかものは、ここを とおす
ことは できない。」

と いって、とおしては くれません。しかたが あり
ませんから、はんたかは 門の そとに のこりました。
ごてんでは、おしゃかさまが せきにおつきに なり
ました。でしたちは その わきに ならびました。

その ときです。ふしぎな ことに、はちを もった

手が、するすると おしゃかさまの 目の まえに のび
て きました。それを みた ごてんの 人々は、びっく
りして しまいました。

王さまは、

「これは ふしぎだ。だれの 手だろう。」

と おっしゃいました。

おしゃかさまは、

「これは はんたかの 手で、ございます。」

あれは 門の そとに いますので、この、はちを わ
たくしに、とどけようと して、手を ここまで のば

したのです。」

と おっしゃいました。

王さまは、すぐ はんたかを、およびに なりました。

はんたかは、しずかに ごてんに あがって きました。

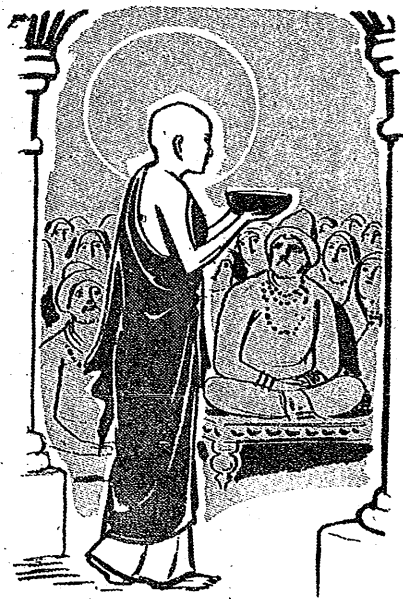
はんたかの

からだから、き

れいな 光が

さして いまし

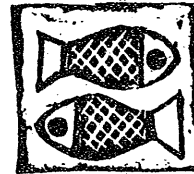
た。



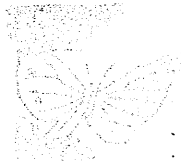


三 ことば あつめ

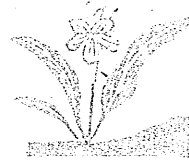
一くみは 花の 名を あつめました。
二くみは 虫の 名を あつめました。
三くみは 魚の 名を あつめました。
四くみは 鳥の 名を あつめました。



花の 名は 十二 あつまりました。
虫の 名は 十五 あつまりました。
魚の 名は 十三 あつまりました。
鳥の 名は 十四 あつまりました。



あつめた ことばに えを かきそえました。
手わけして、その かたちや 色を よく しらべる
ことに しました。



えを かいて いく うちに、花の 名も、
鳥の 名も、だんだん ふえて きました。

先生が、こくばんに つぎのような ことを おかきになりました。

「くみの 人たちに。」

『どんな 花が すきですか。』

くみの 人たちに。

『どんな 虫が いい 虫と おもいますか。』

くみの 人たちに。

『川に いる 魚と 海に いる 魚とを わけなさい。』

くみの 人たちに。

『なき声の わかる ものは、その なき声を かきなさい。』



できあがった ものを うしろの かべに はりました。
みんな おもしろがって みました。



四 はやとり

むかし、ある ところに、一本の くすのきが はえま
した。たいへんな いきおいで、ひるも よるも、ぐんぐ
んと のびて いきました。

なん年か たつ うちに、この くすのきは、いままで
みた ことも きいた ことも ないほど、大きな 木に
なりました。

どうとう、その てっぺんは、空の くもに とどくよ
うに なりました。大きな えだは 四方に ひろがって、
どこから どこまで つづいて いるのか、わからないほ
どに なりました。

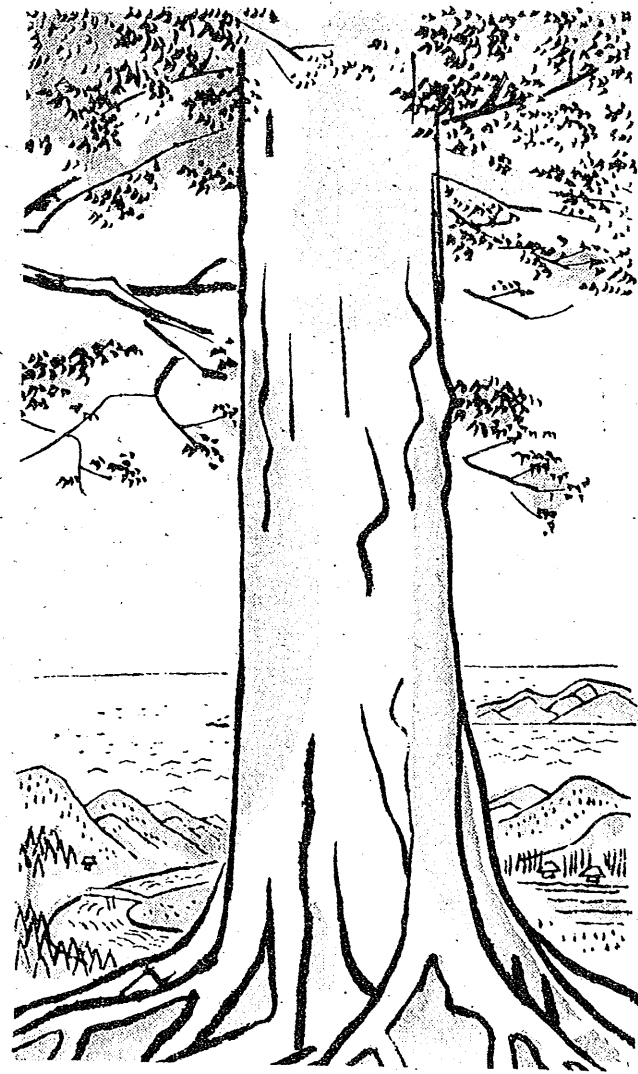
まいあさ 日が でると、この 木の 西がわの なん
十と いう 村々が、日かげに なります。ごごに なる
と、東がわの なん十と いう 村々が、日かげに なり
ます。

「日が あたらないうで、こまった ものだ。」

「お米が はんぶんも できない。」

「なんとか ならない ものかなあ。」

あちらの 村でも こちらの 村でも、こう いって、



この大きな木をみあげました。

あるちえのあるおじいさんがいました。

「かたがない。この木を切ることにしよう。」
みんなはびっくりして、

「こんな大きな木を、切っていいものでしょうか。」
と、いいますと、おじいさんは、

「目のあたるようにするには、切るよりほかにし
かたがあるまい。」

と、いいました。

そこで、切ることになりました。

こんな大きな木のことですから、切るのにも大
さわぎでした。なん十人、なん百人と、いうきこりが、
切りはじめました。長いあいだかかって、やっと切
りたおすことができました。

こんどは、切りたおした木を、どうするかとい
うことになりました。すると、あのちえのあるおじ
いさんが、

「ぐりぬいて、ふねをつくるがよい。
と、いいました。

そこで、大ぜいのだいをあつめて、ふねをつ
くることになりました。なん年かかかって、とうとう
一そうのふねができあがりました。いままでみた
こともきいたこともない、大きなふねでした。

海にうかべて、大ぜいのせんどうがのりこみまし
た。そうして、「えいや、えいや」とこぎました。おどろ
いたのは、そのふねの早いことです。かいをそろ
えて、ひとかき水をかくと、ふねはななつの大な
みをのりきって、鳥のとぶように走るではありま
せんか。

「なんと、いう早いふねだろう。」

「ふしぎだ、ふしぎだ。」

と、せんだうたちも、みて いる 人々も いいました。

すると、あの ちえの ある おじいさんが、

「いや、ふしぎでも なんでもない。あの いきおいの

いい くすのきで つくった ふねだもの、いきおいの

いいのが あたりまえさ。鳥のように 早い ふねだか」

ら、はやとりと いう 名を つけよう。」

と いいました。

その のち、はやとりは、

たくさんの 米や、麦や、

豆を つんで、海を わ

たりました。

その おかげで、日か

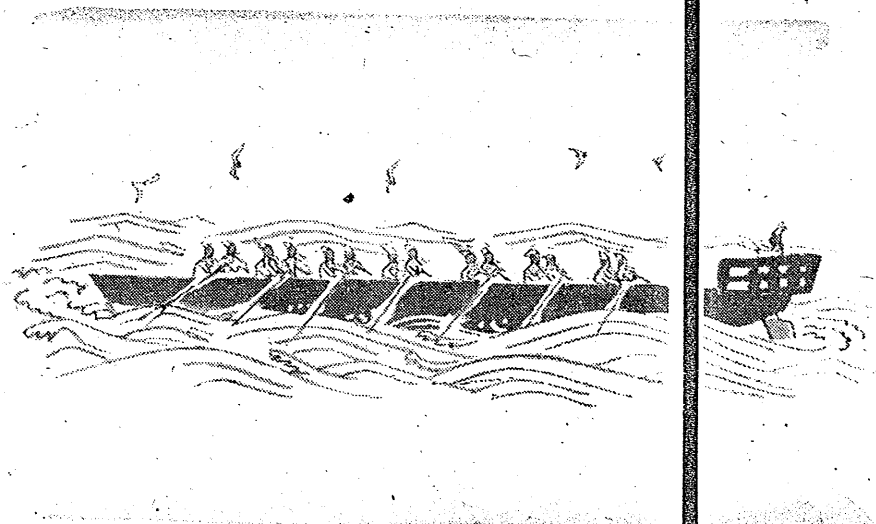
げに なって こまっ

いた たくさんの 村々

は、だんだん ゆたかに

なって いったと いう

ことです。



五 学 校

「学校と いう だいで、作文を する ことになリま
した。」

「じぶんのかきたい ところへ いって、そこで か
いて いらっしやい。」

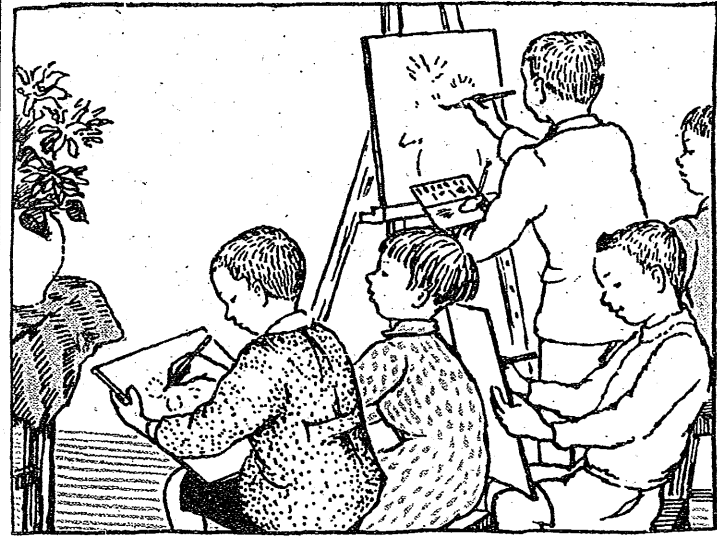
と、先生が おっしゃいました。

みんなは あちらこちらに わかれました。

あとで、できた 作文を、ひとりびひとり よみました。

「ここは ろうかです。長く まっすぐに なって いま
す。右がわは きょうしつで、左がわには まどが な
らんで います。まどから 光が さしこんで きます。
ぼうしかけが ならんで います。」

「わたくしは かいだんを かきます。かいだんは、はじ
めに 十五だん あがって、それから また 十五だん
あがるように なって います。きれいに そうじが
して あります。一だん あがる ごとに、あたりの



ようすが かわります。
てすりは つるつる して
います。
あがった ところの かべ
には、えが はって あり
ます。『じずかに あるく
こと。』と かいて ありま
す。

○
でいり口には、げたばこが

たくさん あります。ぎょうぎ よく むかいあって
います。はきものが きちんと そろって、わたくした
ちの かえるのを まって います。

○
びょうほんしつの まえです。

ほそ長い びんに、さかなが はいって いました。
なの花の 大きな もけいが ありました。青色や ち
や色の くすりびんが、たくさん ならんで いました。
お米や 豆を いれた、みほんの まるい びんも あ
りました。へやの すみに、かれ木が 立って います。

た。そこに、はくせいのおりすが、二ひきのって
いました。ナフタリンのにおいがしてきます。」



「五年生のきょうしつでは、花のしゃせ
いをしていました。まっ白なかびん
に、赤い花がさしてありました。み
んながそのまわりにあつまって、しゃせいをし
ていました。わたくしも、早く大きくなって、あ
んなきれいな花をかきたいとおもいました。」

中にわに、どうもろこしがたくさんはえて
います。ひまわりものびています。いけには、きんぎょが
三ひきおよいでいます。白いくもが水にうつ
っています。やねのところで、すずめがないて
います。その声がよくひびきます。」

「こうきくしつでは、六年生が、はこのようなものを
こしらえていました。かななをつかっている人
もあります。」

のこぎりをひいている人もあります。かなづち

で、くぎを うって いる 人も あります。ガタガタ、
トン、トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、たいへん、
んにぎやかで いそがしそうです。」

○

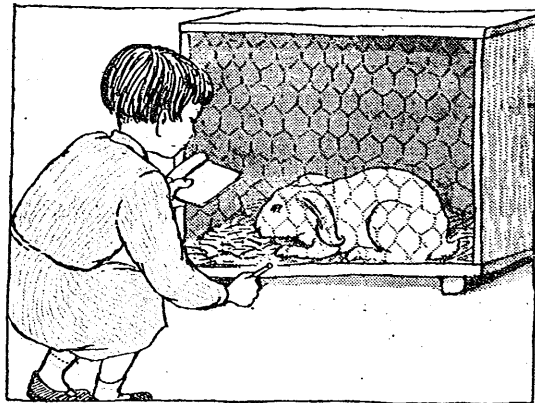
「こづかいさんの おへやは あたたかです。大きな か
まどが ふたつも あります。火が も
えて います。おゆが わいて います。
ゆげが もうもうと たって います。
大きな ろに、大きな やかんが かか
って います。大きな ながしも あります。こづかい」



さんの おへやの ものは、みんな 犬きいなど おも
いました。」

○

「うさぎを かって ある
ところに きました。白い
うさぎが、はこの 中で
ねそべって います。かな
あみに からだを つける
ように、して、ねて いま
す。ときどき 目を ひらいて わたくしを みます。」



うさぎの目はもも色のかわいらしい目です。
しょうかをうたっている声が、オルガンにまじ
ってきこえてきます。」

○

先生がこくばんに、

『みんなの学校。』

みんなのきょうしつ。

たのしい学校にしましょう。

きれいなきょうしつにしましょう。」

とおかきになりました。

六 かえり道

海のような空で、ひばりがないていました。

ぼくらはくさはら道を

あるいてかえりました。

ぼくがまん中で、

右のかたにはいちろ

うくん、

左のかたにはみよこ。



さん。

ぼくらは かたを くんで、くさはら道を あるいて
かえりました。

きょう ならったばかりの しょうかを、大声で うた
いながら あるきました。

くわばたけの くわの はが、
やわらかで、光って いて、

おかいこさんで、なくても たべたいようです。
かぜが ふくと、

くわの はの においが ぶんと します。

「じゃあ しっけい。」

いちろうくんが、右の 方に まがって 行って しま
いました。

ぼくらは ふたりに なって、

麦の ほど すれすれに あるきました。

たんぽぽの みが、小人に なって とんで いました。

『さようなら。』

みよこさんが、左の、かたからはなれて、麦ばたけのよこ道を、かえりました。

『さよなら 三かく、』

また きて 四かく。』

ひとりぼっちに なって しまいました。

ぼくは、学校どうぐを わきに かかえて、どんどん走って かえりました。

七 白うさぎ

白うさぎが、島から むこうの りくへ 行って みた。いと 思いました。

ある 日、はまべに でて みると、わにぎめが いましたので、これは いいと 思って、

『きみの なかまと ぼくの なかまと、どっちが多いか、くらべて みようではないか。』

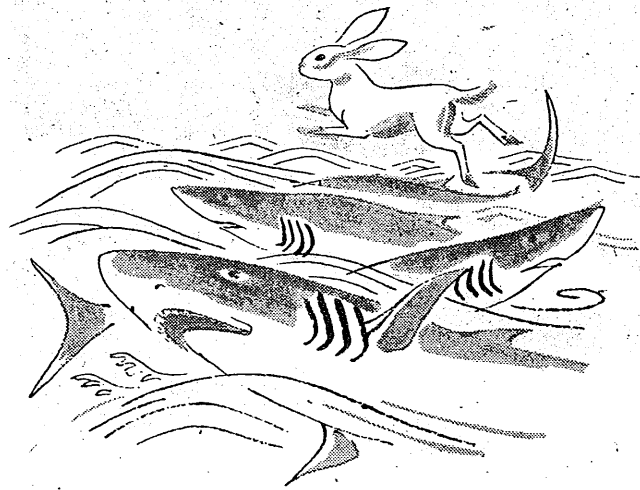
と いいました。わにぎめは、

『それは おもしろかるう。』

と いて、すぐに なかまを 大ぜい つれて きました。
た。白うさぎは それを みて、

「きみの なかまは ずいぶん 多いな。ぼくらの ぼう
が まけるかも しれない。ぼくが、きみたちの せな
かの、上を、かぞえながら とんで いくから、むこう
の りくまで ならんで みたまえ。」
と いいました。

わにぎめは、白うさぎの いう とおりに ならびまし
た。白うさぎは、「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ」と かぞ
えながら、わたって いきました。もう ひと足で りく



へ あがろうと いう と

き、白うさぎは、

「きみたちは うまく だま
されたな。ぼくは 海を

わたって きたかったのだ。

あははは。」

と いて わらいました。

わにぎめは それを き

くと、たいそう おこりま
した。いちばん しまいに

いた わにぎめが、白うさぎをつかまえて、からだの
けをみんなむしりとってしまいました。

白うさぎはいたくてたまりません。はまべでしく
しくなっていました。そのとき、みなりのりっぱ
なかたがたが大ぜいおどおりになって、

「おまえはなぜないているのか。」

とおたずねになりました。白うさぎが「いままでの
ことをはなしますと、そのかたがたは、

「それなら、海の水をあびて、ねているがよい。」
とおっしゃいました。



白うさぎはすぐ海の水をあびました。すると
いたみがいっそうひどく
なって、とてもたまらなく
なりました。

そこへ、おおくにぬしのみこ
どがいらっやいました。こ
のかたは、さきほどおどおり
になったかたがたのおど
うとさんです。にいさまがたの
おもいふくろをせおって

いらっしゃったので、おそく おなりに なったのです。

おおくにぬしのみことも、

「なぜ ないて いるのか。」

と おたずねに なりました。白うさぎは いままでの
ことを はなしました。

「それは かわいそうだ。早く 川の 水で からだを
あらって、がまの ほを しいて、その 上に ねるが
よい。」

白うさぎが その とおりに しますと、からだは す
ぐ もとのように なりました。

八 高い 高い

かぼちゃの花

かぼちゃの花が さきました、
あんな ところに さきました。

よあけに ぱあど まっき色、
つゆを ふくんで さきました。

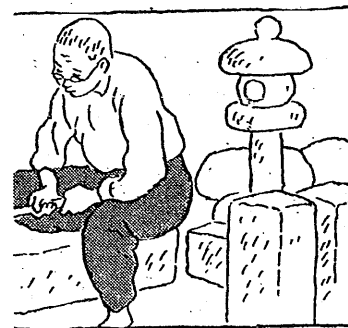


かぼちゃの花が、さきました、
はかげに ふたつ さきました。

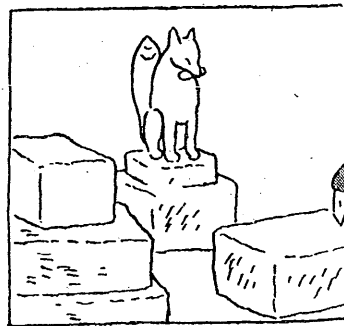
かなかなぜみも、目が、さめて、
かぜに ゆれゆれ さきました。

石やさん

かっちゃん かっちゃん 石を 切る。
めがねを かけて 石を 切る、
目もとを すえて 石を 切る、
あせを ながして 石を 切る。



かっちゃん かっちゃん 石を 切る。
石より かたい のみの さき、
のみより つよい うでさきで、
かっちゃん かっちゃん 石を 切る。



かっちゃん かっちゃん 日が くれて、
火花が みえる のみの さき。
のみの 手もとは くらくても、
かっちゃん かっちゃん 石を 切る。

高い 高い

ありは すみれの 花に のぼり、

「高い、高い。」と いいました。

うぐいすは うめの 木に とまり、

「高い、高い。」と いいました。

りすは しらかばの 木に はねて、

「高い、高い。」と いいました。

いなかの やねの ペンペンぐさは、

「高い、高い。」と いいました。

こどもは 石の 上に 立ち、

「高い、高い。」と いいました。

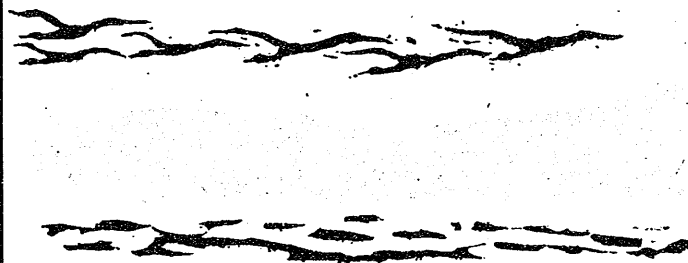
おてんとうさまは 空に てり、

「高い、高い。」と いいました。





山が あれた、
海が あれた、
かぜで あれた。
おびに なって、
ひもに なって、
がんが かえる。



がん
がんが かえる、
がんが かえる、
がんが かえる。
たすきに ならんで、
がんが かえる。

カナリヤ

うたを わすれた カナリヤは、

うしろの 山に すてましょか。

いえ、いえ、それは なりません。

うたを わすれた カナリヤは、

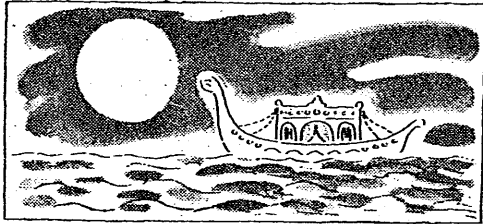
せどの こやぶに いけましょか。

いえ、いえ、それも なりません。

うたを わすれた カナリヤは、

やなぎの むちで ぶちましょか。

いえ、いえ、それも なりません。



うたを わすれた カナリヤは、

ぞうげの ふねに ぎんのかい、

月夜の 海に うかべれば、

わすれた うたを 思いたす。

九 五人の子ども

みずうみ

五人の子ども おうちは、丘の上にあるのでも、
ふもとにあるのでもありません。丘のちょうどな
かほどにあるのです。それで、おりれば みずうみへ
でられますし、のぼれば 大きな木のあるところへ
でられます。

ある日、みんなで あそびに 出かけました。

「ねえ、大きな木のどこ」

ろまで のぼって みよう。」

と、ジュデーが います。

「いや、みずうみへ おりよ」

うよ。」

と、デビッドが います。

「だめよ、だめよ。」

と、ジュデーが います。

「いいよ、いいよ。」

と、デビッドが います。



ほかの 子どもたちは、どう きまるか まって います。みんなの 心が あわないと、どこへも いけません。そこへ ちょうど おとうさんが おいでに なって、
「どこへ いこうかね。」

と おききに なりました。

「この 丘の 上の 大きな 木の ところ。
ジュデーは こう います。」

「みずうみ、みずうみ、この 丘の 下の。
デビッドは こう います。」

「みんなの 心が あわないと、どこへも いけないじゃないか。」

そこで おとうさんは えんがわに こしを おろして、
どう きまるか おまちに なりました。ほかの 子ども
たちも、こしを おろして、まって いました。

その とき、マイクルが、

「あのねえ、丘の 木の ところまで のぼってき、それ
から さっさと かけおりて みずうみへ いこうよ。」
と いいました。

「こりゃあ うまい かんがえた。」

おとうさんは そう おっしゃって、ジュデーに おき

きになりました。

「それで いいかい。」

「はい。」

ジュデーは いました。

「デビッドも それで いいかい。」

「はい。」

デビッドは いました。

「みんな それで いいね。」

「はい。」

みんなも 声を そろえて へんじを しました。

みんなの 心が あいましたから、いっしょに なって、
丘の 大きな 木の ところまで のびりました。そうして、
そこで おもしろく あそんでから、丘を おりて
みずうみへ でした。

みずうみには ボートが うかんで いました。みんな
は、ボートに のりこみました。三人の 男の子は、うし
ろに こしかけました。ふたりの 女の子は、まえに こ
しかけました。まん中には、おとうさんが こしかけて、
ボートを おこぎに になりました。みずうみを 右へ い
けば もりへ できます。左へ いけば たきへ できます。

「どちらへ いきますか。」

おとうさんは おききになりました。

「右の方。」

と、女の子たちが いました。

「左の方。」

と、男の子たちが いました。

「りょう方 いっぺんには いけないよ。右手と 左手を
はんたいに こいたら、ぐるぐるまわりを するばかり
だ。はじめに 右か 左か どちらかへ やらなければ。」

「右。」

と、女の子たちが いうと、

「左。」

と、男の子たちが いました。

また、心が あわなく なりました。そこで、おとうさ
んは、ボートを こいで ぐるぐる おまわり
になりました。もう みんなは どこへも いけません。
「だって、もりへ だいたんだもの。」

バーバラが いました。

「たきへ だいたんだもの。」

マイクルが いました。

「心が あわなくて は だめ、だめ。」

おとうさんは そう いって、また ぐるぐるまわりを
なさいました。

その とき、ピーターが、

「どっちへ いったら いいか、風に きいて みようよ。」
と いいました。

「そりゃあ うまい かんがえだね。」

と、ジュデーが いいました。

「それで いいかい。」

おとうさんは 女の子たちに おききに なりました。
「はい。」

女の子たちは いいました。

「それで いいかい。」

おとうさんは 男の子たちにおききに なりました。
「はい。」

男の子たちも いいました。

「じゃあ、雲を みて ごらん。そうして、風が どちら
へ ふいて いるか、みて ごらん。」

と、おとうさんが おっしゃったので、みんなは 空を
みあげました。青々と した 中に、ふんわりした、小さ



な、白い雲がとんでい
ました。雲は、もりの方へ
しずかにしずかにとんで
います。

「風はなんていってるの。」
おとうさんがおききに
なりました。

「もりの方」って、いってま
す。
バーバラがいました。

みんなの心があいました。

「さあ、これでいけるぞ。」

おとうさんはおっしゃいました。

「はじめに、もりへ、いって、それから、たきへ、でよう」
ね。

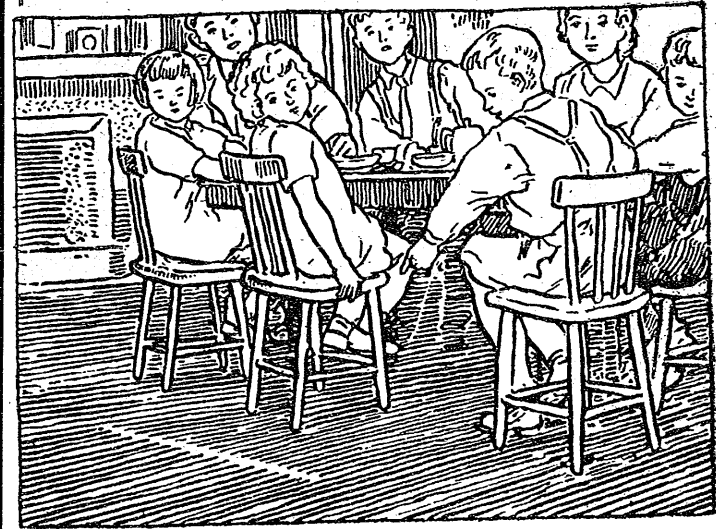
それから、みんなはおもしろくあそびました。

お日さま

五人の子どもは、ゆうごはんをたべていました。

そのとき、ピーターはふ
と、ゆかの 上に なにか
あるのを みつけました。
「あれ、あれ ごらんよ。」
ピーターは 大声で いい
ました。
ゆかの 上に、なにか、長
い、光った、ぴかぴかした
ものが あります。

「なんだか つまんで みよ」



デビッドが いいました。

「つまんで ごらん。」

おかあさんが おっしゃいました。

そこで、デビッドは いすから おりて、つまんで み
ました。けれども、つまむ ことは できません。

「わたしが はきだして あげよう。」

バーバラが いいました。

「では、はいて ごらん。」

おかあさんが おっしゃいました。

そこで、バーバラは、だいどころから「ほうきを もっ
てきて はきました。けれども、はきだす ことも べ
きません。やはり ゆかに のこって います。

「あれ なあに。」

マイクルが たずねました。

「白い ひもかしら。」

おかあさんは おききかえしに なりました。

「ちがうよ。」

みんなが いいました。

「きんの リボンかしら。」

「ちがうよ。」

みんなが こたえました。

「きらきらした 水かしら。」

「ちがうよ。」

「ぴかぴかの かみかしら。」

「ちがうよ。」

「お日さまの 光かしら。」

「あ、そうだ、光だ。」

はじめて みんなが こう さげびました。

「これ、どこからやってきたの。」

マイクルが たずねますと、

「では、光の とおり道を さがして みましょう。」

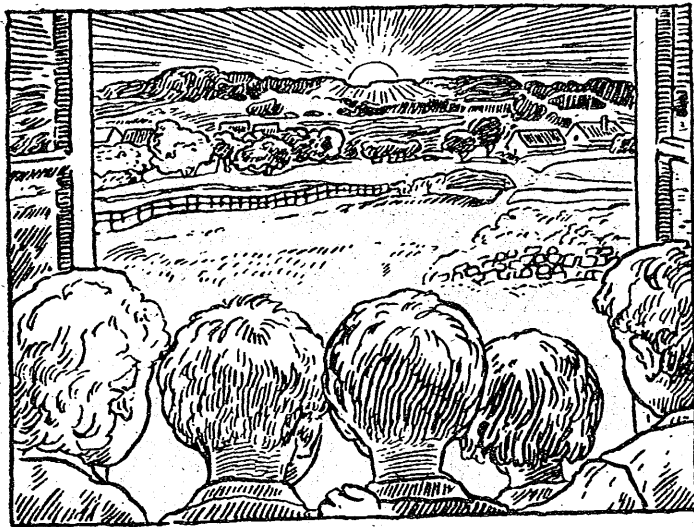
と、おかあさんが おっしゃいました。

それで、みんなは いすを おりて、その 光の 中を
あるいて いった、まっすぐに まどぎわへ でした。

「まどから のぞいて ごらん。あの 丘の 上を。」

おかあさんが おしえて くださいました。みんなは

そこを みました。お日さまが 光りながら、いま、丘の



「お日さまの 光は お日さ

まから やって きたのね。」

「ほら、どう なるか、きを

つけて みて、いなさい。」

その うちに、赤い お日

さまは 丘の かげへ しず

んで いきました。

「おや、さっきの お日さま

の 光、どこへ いったの。」

ピーターが 大声を あげ

ました。

みんなで さがしまわりましたが、ゆかの 上には も
う みえませんでした。

「お日さまが つれて いって しまったのよ。」

おかあさんが おっしゃいました。

「お日さまって どこへ いくのかなあ。」

と、デビッドが たずねます。

「丘を こえてね、よその 國へ いくんですよ。」

「じゃあ、お日さまは よその 國で なにを するの。」

こんどは マイクルが たずねました。

「よその 國の 子どもたちに 光を あげるのですよ。」
「なぜ。」

「お日さまは 一つしか ないから、みんなで かわりば
んこに お目にかかるのです。あなたたちが ねて
いる あいだ、お日さまは、よその 國の 子どもが
あそべるように、光を あげに、いくのです。それから、
あさになって、お日さまが あなたたちの ところへ
かえって くるのです。だから、だれにも ひると よ
るが あるのです。」

「あしたの あさも、お日さまは きっと かえって き」

てくれるの。」

と、デビッドが ききますと、

「よその 子どもたちが わたしの お日さまを とって
しまふのは いや。」

と、ジュデーが いいます。

「お日さまは まいあさ かえって きますよ。だれにも
お日さまは とられません。雲さえ でて いなかった
ら、まいあさ あえますよ。」

にじ

五人の 子どもが、もみじの こかげの すなばで あ
そんで います。すなで、トシネルや、いどや、家や、道
を こしらえて、います。むちゅうで あそんで います
たので、だれひとり、上を みたり まわりを みたり
する ひまも ありませんでした。にわかに パラ パラ
パラ、ポト ポト ポトと いう おどが きこえました。
みんなは 空を ながめました。雨でした。

「こら、雨、あっちへ いけ。」

バーバラが いいました。

「だめだよ。雨に ぼくの いどを いっぱいに して、

もらうんだから。」

と、デビッドが いいます。

「つまらないなあ。ぼくの

道は、雨に めちゃめちゃ

に されちゃった。」

と、マイクルが いいます。

雨は、みんなの いう こ

とには おかまいなしに、ど

んどん ふりつづけます。

みんなは どうとう えい



んがわまで にげて いきました。

そのうちに、雲は 雨をつれて、空を すすんで い

きました。そこへ お日さまの 光が さしはじめました。

すると、色りボンのような にじが 空に かかりまし

た。

「赤い 色、みえた。」

ピーターが いいました。ピーターは 赤が すきでし

た。

「みどり色、みえた。」

マイクルが いいました。マイクルは、みどりが すき



でした。

青い色、みえた。」

ジュデーが「いいました。」

ジュデーは「青がすきでした。」

「わたしのもも色、みえな
いわ。」

バーバラが「いいました。」

「き色でもいいじゃない
か。」

デビッドが「いいました。」

「ぼくは、だいたい色にするからね。」

そのとき、おかあさんが「えんがわにでていらっ
しゃいました。」

「あなたたち、にじがみえて。」

とおききになりました。

「みえたよ。」

「あんなところに、だれがかけたの。」

と、マイクルが「ききました。」

「お日さまが、雨のつぶつぶをしゃぼんだまみたいに

光らせるのよ。」

だんだんにじもきえていきます。

ピーターは、はのさきにあまだれがあるのをみ

つけて、

「ごらんよ。」

と、いいました。

みんながみまずと、そのあまだれの中に、小さな
にじがみえました。

十 ひびき

あさからよるまで

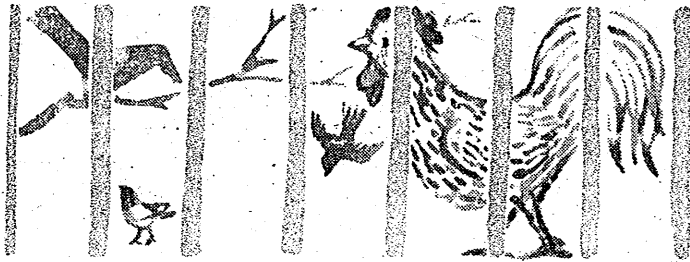
こけこっこう、こけこっこう。

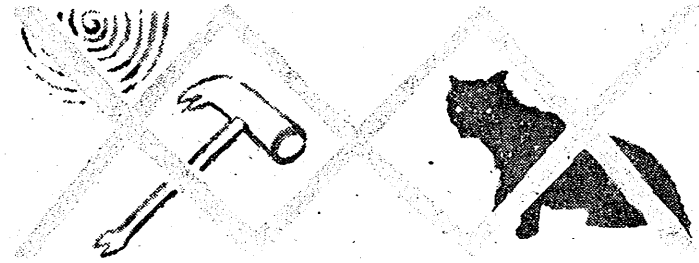
かあかあ、かあかあ。

ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

ボン、ボン、ボン、ボン。

ガラガラガラ、ガラ、トン。





チンチン、ゴウゴウ。

ポポウ、シュシュシュシュシュ。

ブフウ、ブフウ。

ギイチラコ、ギイチラコ。

げくげくげく、げくげくげく。

さらさらさら、さらさらさら。

にゃお、にゃお、にゃお。

じい、じい、じい。

カチ、カチ、カチ。

わんわん、わんわん。

まちの音

ザザザ、ザザザ、ザザザ。

ルウウ。

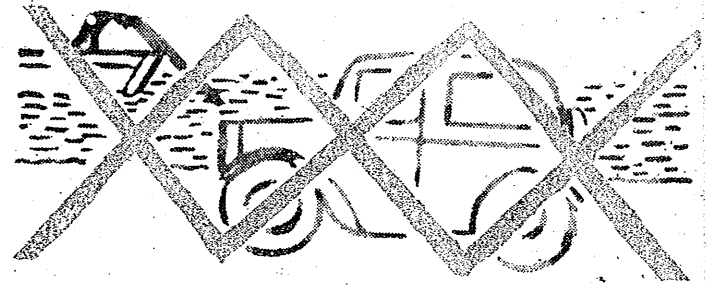
リリリリリリ。

ダラッ、ダラッ、ダラッ。

パッシッセ、パッシッセ、パッシッセ。

ジュッ。

ふきあがる。



はげしく まわる。
すべる、すべる、ながれる。

ウォン、ウォン、ウォン。
シュウ。

ガン、ガン、ガン、ガン。
ソソフ、ソソフ、ソソフ。
キイン。

こまのように まわる。
まわって うなる。

○

じぶんの 耳で きいた ひびきを、かきとって みま
しょう。

ていしゃばでは、どんな ひびきが きこえるでし
ょう。
学校では、どんな 音が するでし
ょう。

かいがんで は どうでし
ょう。

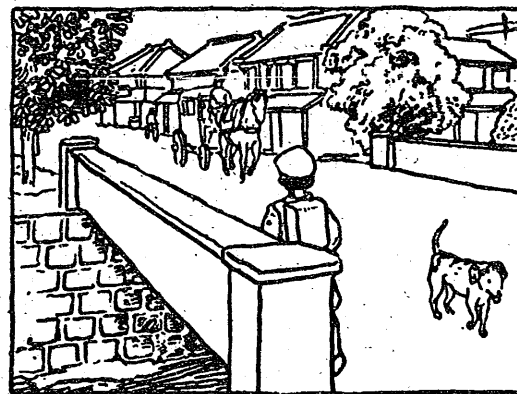
こうばでは、どうでし
ょう。

みなどでは、どうでし
ょう。

風の日にはどんな音。
雨の日にはどんな音。

十一 みんなのもの

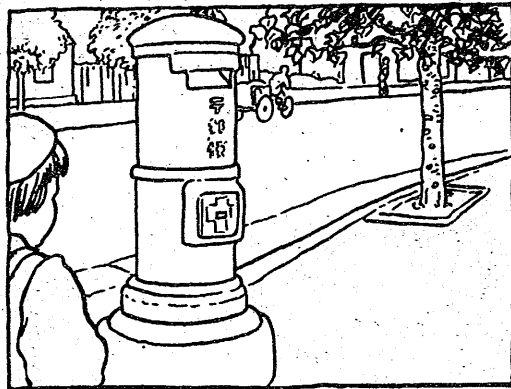
このはしはみんなのもので
す。
ばしゃもとおります。
じどうしゃもとおります。



いぬも 走って いきます。
わたくしは、学校へ いく ときと かえる ときに
ここを とおります。

このはしが なかったら どう
しましょう。

このポストも みんなのもの
です。うちの人の かいだてが
みや はがきを、ここに いれます。
きんじよの人たちも このポ



ストに いれます。

くさを ちぎって いれたり、かみきれを いれたり
する 小さな 子が いたら、とめて やりましょう。

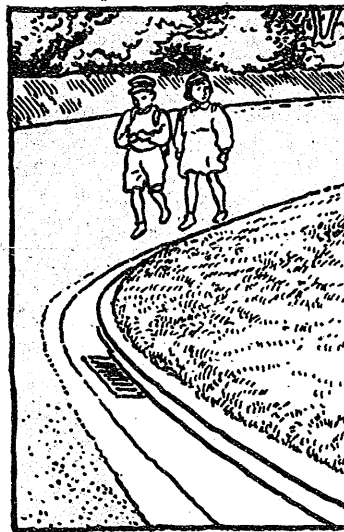
こうえんに さいた きれいな 花は、みんなの 心を
たのしませて くれます。

「花を おらないで ください」
い。みに きた 人が、一
本ずつ おって しまえば、
いまに みんな なくなっ



て しまうでしょう。どう
ぞ おらないで ください。

この ていしゃばも みんな
なの ものです。



この でんしゃも みんなの ものです。

ここの しばふも みんなの ものです。

やわらかな もうせんを したような しばふ、みど

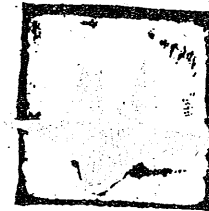
り色に つやつやと 光った しばふ。

「よごさずに かわいがって ください。」

お月さまも みんなのもの。

あの まっ白な 雲も みんなのもの。

よるの ほしも、あさの 風も、みんなのものです。



十二 一まいの紙

一まいの紙で、いろいろなものを おる ことができます。

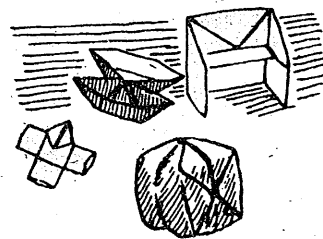
ふねを おる ことも できます。ピアノや ふくすけ

を おる ことも できます。きつね

や、だましふねや、紙ふうせんなども

おる ことができます。

この 一まいの 紙が、いろいろな
かたちに なったり、ふくれたり、立
ったり します。



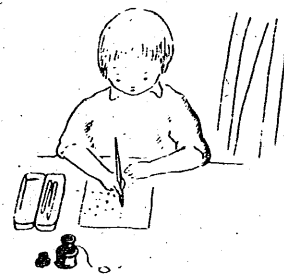
この 一まいの 紙に、えを かく こと
ができます。

おとうさんの かおも、先生の つくえも

かくことができます。

にわの花も、空の雲も、とおい山も、ちかい家も、かくことができます。

クレヨンでかくこともできます。えんぴつでかくことも、ふででかくこともできます。



また、この一まいの紙に、字をかくことができます。

大きな字でも、小さな字でも、かくことができます。

はやくかくことも、ゆっくりかくこともできます。

ひらがなをかくことも、かた

かなをかくこともできます。

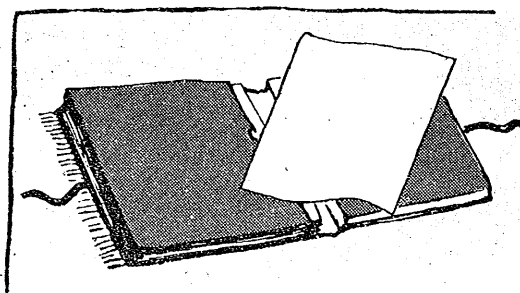
かん字をかくこともできます。

ローマ字をかくこともできます。

心に思ったことは、いつの

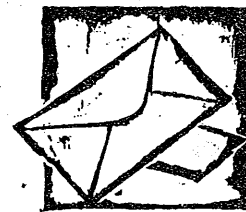
まにかきえてしまいますが、紙

にかいたものは、いつまでも



のこります。

口ではなしたことは、そのままきえてなくなり、
ますが、紙にかいたおはなしは、いつまでものこります。



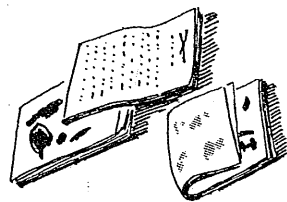
一まいの紙にかいたえを、どこにかざりましよう。

紙にかいた字を、どこへおくってあげましょう。

どんなとおいところでも、紙は、字やえをはこんでくれます。

先生が、

「みなさんのかいたえでも、字でも、だいじにしまっておきなさい。みなさんが大きくなってから、それをみるのは、ほんとうにたのしいものですよ。」



とおっしゃいました。

十三 かぐやひめ

むかし ある ところに、「竹とりのおきなと いう おじいさんが すんで いました。

おじいさんは、まいにち、のや 山へ 竹を とり に いきました。

ある 日 の ことです。おじいさんが、だれよりも はやく 山に いって、

「どれ、ひとしごと しよう。」

と、竹やぶを みまわして いますと、ねもとの ぴかり

と 光る 竹が 一本 ありました。ふしぎに 思って、

その 竹を 切って みますと、小さな、きれいな おひ

めさまが すわって います。

した。

おじいさんは よろ

こんで、

「これは わた

しに さずか

った 子に

ちがいない。」



と、てのひらに のせて かえりました。そうして、かごの中に いれて、おばあさんと ふたりで だいに、そだてました。

それからと いう ものは、おじいさんの とる 竹の中には、たびたび こがねが はいって いました。おじいさんの うちには だんだん かねもちに なりました。

また、小人のようだった おひめさまは、三月ほどのあいだに、すくすくと せいが のびて、ふつうの 人の大きさに なりました。その うつくしさは たとえようもなく、家の すみずみまで 光りがやくほどなので、

「かぐやひめと いう 名を つけました。」

おじいさんは、きもちの わるい ときでも、はらの たつ ときでも、この かぐやひめの かおをみると、すぐ なおりました。

世の中の 人たちは、

「光るように うつくしい かぐやひめに、ひと目でも

あいた い ものだ。」

と いって、まいにち まいばん あつまって きて、おじいさんの 家の まわりを とりまきました。そうして、かきねの上から のびあがって みたり、へいの すき

まから のぞきこんだり しました。

一どでも かぐやひめを、みた 人たちは、

『どうかして、あんなに きれいな 人が およめにも
らいたい ものだ。』

と、思つて、みんな いっしょうけんめいに おじいさん
に たのみました。その 中には、みやさまがたも おい
でに なりました。

けれども、かぐやひめは、

「わたくしは、だれの ところにも およめに いきませ
ん。いつまでも おじいさんと おばあさんの おそば

に いたいと 思います。」

と、いつて、どんな りっぱな 人の ねがいをも、みん
な ことわつて しまいました。

たいていの 人は、あきらめて しまいました。が、さい
ごまで どうしても あきらめない 人が、なん人が の
こりました。それで、かぐやひめは、その 人たちに と
ても むずかしい ことを、いつて、それが できたら
およめに、いくと、いいました。

けれども、かぐやひめの、いうようには、だれも する
ことが、できませんでした。

かぐやひめの ひょうばんが、だんだん 高く なった
のを、みかどが おききになつて、

「それほど きれいなのなら、ごてんに、よびたい。」

とお思ひになりました。それで、おじいさんに、

「もし、かぐやひめを、ごてんに つれて きたら、おま
えに くらいを さずけて やろう。」

とおっしゃいました。おじいさんは、かぐやひめに こ
の ことを つたえて たびたび すすめました、が、

「どこへ、いくのも いやで ございます。」

と、いつて、かぐやひめは やっぱり ききませんでした。

みかどは、おじいさんと、ごそうだんに なつて、ある

日、かりの おかえりに、とつぜん おたちよりにな
りました。

家にはいつて、ごらんになると、光の 中に きれ
いな おひめさまが すわつて います。

「あれが かぐやひめだな。ひょうばんよりも ずっと
うつくしい。」

とお思ひになつて、すぐ ごしよに つれて、かえろ

うと なさいました。すると、かぐやひめの すがたが
きゅうに みえなく なりました。

みかどはびっくりなさって、

『では、つれていくのはやめよう。』

とおっしゃいますと、かぐやひめは、またすがたを

あらわしました。みかどは、

『これはただのにんげんではあるまい。』

とお思いになって、そのままおかえりになりました。

そののち、みかどからたびたびお手紙をくださいましたので、かぐやひめも、そのたびにごへんじをさしあげておりました。

ある年の春のころから、月のきれいなばんになると、かぐやひめは、空をながめてはためいきをつき、じっとかんがえこむようになりしました。

あきがきて、月がうつくしくなると、かぐやひめのようすは、いっそうかなしそうにみえました。

十五夜がちかくなつたある夜、かぐやひめは、とうとう声をたててなきだしました。おじいさんとおばあさんは、おどろいて、そのわけをたずねました。かぐやひめは、

『おふたりが どんなに おかなしみに なるかと 思っ
て、いままで だまって いましたが、ほんとうは、わ
たくしは 月の 世界の もので ございます。この
十五夜には、月の 國から むかえが きて、かえらな
ければ なりません。』

と こたえました。

この 思いがけない ことばを きいて、おじいさんも
おばあさんも びっくりしました。

『どうかして、かぐやひめを 月の 世界の 人に わた
さない くふうは あるまいか。』

と、ふたりは いろいろ かんがえました。あまり しん
ばいしましたので、かみの けが 白く なり、こしも
まがって しまいました。

みかどが この ことを おききになつて、たいへん
かわいそうに 思いになりました。それで、たぐさん
の けらいに いったつて、まもつて くださる ことにな
りました。

いよいよ、十五夜に なりました。

おじいさんの 家の まわりは、弓矢を もった 人た
ちで、いくえにも とりかこまれ、やねの 上まで、人で

いっばいになりました。

おばあさんは、しめぎったくらの中で、しっかりと
かぐやひめをだいていました。おじいさんは、その
いり口でばんをしていました。

夜中になって、お月さまが一どに十もでたかと思
われるほど、あたりがあかるくなりました。

「さあ、きたぞ。」

けらいたちは、弓に矢をつがえました。ところが、
ふしぎなことに、手足の力がなくなって、なにを
することもできなくなっていました。

そのうちに、空から大ぜいの天人たちが、雲に
っておりてきました。すると、しめきっておいた
くらの戸がひとりでにあきました。そうして、おば
あさんがだいていたかぐやひめのからだは、すう
っとそとへでてしまいました。もう、ひきとめる
こともどうすることもできません。

かぐやひめは、おじいさんとおばあさんに、
「いつまでもおそばにいて、こうこうをいたいと
思いましたのに、ほんとうにおなごりおしゅうござ
います。せめて月夜には月をみて、わたくしの

ことを思いたして、
 ぐださい。
 といって、
 きていた うわぎを



ぬいで、おばあさん
 に わたしました。
 天人が はごろも
 を きせようと する



と、かぐやひ
 「もう す
 と いって、
 ふしの く
 天人は、

めは、
 こし おまちください。
 みかどへ おわかれの 手紙と
 すりを のこしました。

いそいで かぐやひめに はごろもを
 きせました。かぐやひめの すがたは、
 それは それは うつくしく かがや
 きました。そこで、よいいの 車に
 のって、しずかに 天へ のぼって い
 きました。

みかどは、そののちいつまでも、かぐやひめをお
わすれに なる ことが できませんでした。そうして、
ふしの くすりと 手紙は、かえって かなしみを ます
たねに なるばかりでしたので、ある とき、

「天に いちばん ちかい 山は どこか。」

と、おつきの ものに おたずねに なりました。

おつきの ものは、

「するがに ある 山が いちばん みやこにも ちかく、

天にも ちかいそうで ございます。」

と もうしあげました。

みかどは、

「その 山の上で、ふしの

くすりと 手紙を やきすてよ。」

と おいいつけに なりました。

おつきの ものは その とおりに しました。

すると、ふしの くすりを やいた けむりが、山の

上から いつまでも いつまでも たちのぼって いました。

それで、この 山の 名を、「ふじの 山」と いうようにな
りました。



ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ
	ヰ	リ	イ	ミ	ヒ
	ウ	ル	ユ	ム	フ
	エ	レ	エ	メ	ヘ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ

ナ	タ	サ	カ	ア
ニ	チ	シ	キ	イ
ヌ	ツ	ス	ク	ウ
ネ	テ	セ	ケ	エ
ノ	ト	ソ	コ	オ

ビャ	ビャ	ヂャ	ジャ	ギャ	リャ	ミャ	ヒャ
ビュ	ビュ	ヂュ	ジュ	ギュ	リュ	ミュ	ヒュ
ビョ	ビョ	ヂョ	ジョ	ギョ	リョ	ミョ	ヒョ

ニャ	チャ	シャ	キャ	パ	バ	ダ	ザ	ガ
				ピ	ビ	ヂ	ジ	ギ
ニユ	チュ	シュ	キュ	プ	ブ	ツ	ズ	グ
				ペ	ベ	デ	ゼ	ゲ
ニョ	チョ	ショ	キョ	ポ	ボ	ド	ゾ	ゴ

K/160,8-1-3

界 (110)	女 (63)	道 (39)	百 (26)	門 (15)	光 (5)
弓 (111)	風 (66)	島 (43)	早 (27)	名 (18)	白 (7)
矢 (111)	雲 (67)	思 (43)	麦 (28)	虫 (18)	東 (8)
力 (112)	家 (79)	多 (43)	豆 (29)	魚 (18)	西 (8)
天 (113)	雨 (79)	石 (50)	作 (30)	海 (21)	南 (8)
戸 (113)	音 (87)	夜 (57)	文 (30)	方 (22)	北 (8)
	紙 (94)	子 (58)	右 (31)	村 (23)	鳥 (10)
	字 (96)	丘 (58)	左 (31)	米 (23)	心 (13)
	世 (103)	男 (63)	火 (36)	切 (25)	王 (14)

寄 贈
B610 22.4

こくこ 三 第二学年前期用
Approved by Ministry of Education
(Date Feb. 21, 1947)

昭和二十二年二月廿一日 翻刻印刷
昭和二十二年三月十五日 翻刻發行
〔昭和二十二年二月廿一日 文部省検査済〕

著作權所有 著作權發行者 文 部 省

翻刻發行 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社
兼印刷者 東京書籍株式會社
代表者 井上源之丞

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社
發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社



K1608
1
4